

# until節に生起する動詞句の意味論的制約

林 高宣\*

Takanori HAYASHI\*  
Semantics of the Verbs in *Until*-Clauses

## Abstract

In terms of aspect, Vendler (1967) distinguishes four classes of verbs: states, activities, accomplishments and achievements. Heinämäki (1974), however, proposes the three-part distinction: duratives (states and activities), non-duratives (achievements) and accomplishments, and describes that all three types of verbs can appear in *until*-clauses. This remark on the verbs seems to be inconsistent with the facts. Non-duratives and accomplishments can appear freely in *until*-clauses whereas verbs in progressive aspect, which are considered to be duratives, are not always allowed.

In this paper, I propose the semantics of verbs in *until*-clauses, which stipulates that verbs in the clauses should have two interrelated grounds for the appearance: (A) With reference to tense, they have a temporal, instantaneous reference time ( $R_1$ ) to designate the terminal point of the main clause; and (B) Aspectually, they have a potential starting or end point ( $R_0$ ) which is anchored by  $R_1$  on the time line. Then, it is shown, with the aid of these stipulations, that accomplishments and achievements in *until*-clauses are unmarked cases where  $R_0$  is marked with  $R_1$  on the time line while verbs in progressive are marked ones where  $R_0$  is not marked with  $R_1$ . In the former,  $R_1$  is simultaneous with  $R_0$  on the time line. But, in the latter,  $R_1$  does not fall on  $R_0$  and there is a time lag between them. The grammaticality for the latter is guaranteed by the fact that  $R_0$  is a reference point from which  $R_1$  is easily accessible. I also point out that seemingly stative verbs should not be recognized as states but as achievements (or accomplishments) in *until*-clauses.

【キーワード：アスペクト，時制，潜在的基準点，瞬時的基準時，参照点】

## 0. はじめに

until節は主節事態を境界化するため，そこに現れる動詞句は完結的でなければならない，あるいは瞬時的なものに限られるとされてきたが，実際には状態動詞とみなされるものや進行形も見られる．なぜこれらがuntil節に生起可能であるかについては説明が試みられているが，その説明は個々の現象に対して個別の説明を与えるにとどまっている感がある．until節に生起する動詞句を網羅する，厳密な意味での境界化を説明するためには，さらに一步踏み込んで，いかなる要因がuntil節の境界化を引き起こしているのかという点を明らかにしなければならない．本稿では，これまでの論考を踏まえつつ，進行形を含めてuntil節に生起可能な動詞句の特徴を考察していきたい．そして，事態の潜在的基準点（開始点・終結点）と瞬時的基準時の2点から動詞句がuntil節に生起可能となることについて述べる．

## 1. 出水（2002）

まず，until節に生起可能な動詞句の説明として出水（2002）にふれておきたい．出水は[+telic]というアスペ

クト制約のみではuntil節に現れる状態動詞や進行形を説明できないと考え，その代案として動詞句がboundedであるとする制約を提案している．

- (1) a. until節内の動詞句はboundedでなければならない．  
b. until節の機能は，until節内のboundedな事象がもつ時間的境界を，主節のunboundedな事象へと写像することで，主節の事象を境界化することである．（出水 2002: 67）

これに従って，出水は4タイプの動詞句を以下のように説明している．

最初に，到達動詞 (achievement)，達成動詞 (accomplishment) であるが，これらは同一グループに含まれ，[+bounded][+telic]という特徴を持つ．

- (2) a. Alex danced until the music stopped.  
（Kittredge 1969: 45）  
b. We waited until Mark washed the dishes.  
（Heinämaäki 1978: 81）

動詞句が[+telic]であるため，until節事態に内在的終結点が存在し，これが時間的境界としての機能を果たしていると出水は言う．

次に，行為動詞 (activity) について説明している．

\* 島根大学教育学部言語文化教育講座

この動詞句は [-bounded] かつ [-telic] である。

(3) \*He stayed here until the guest waited.

(今井・中島 1978: 393)

境界化という機能を果たすためには、until 節の動詞句が時間的境界を有する必要があるが、行為動詞が表す事態は時間的に幅を持っており、境界という線的なものとしては機能できない。その結果、until 節に生起不可能となる。

さらに、until 節に [-bounded] [-telic] な状態動詞が生起した場合、起動相的解釈によって状態動詞は [-bounded] [+telic] と再解釈される。

(4) John soaked the spaghetti until it was soft.

(Kittredge 1969: 39)

状態動詞は均質な事態を表しているが、出水によれば境界化がなされる場合、境界として機能するのは均質な状態の時間的に最も初期の部分である。つまり、(4) においてはスパゲティがやわらかくなった最初の段階が境界化の機能を果たすことになる。

最後に、until 節に進行形が現れる例がある。

(5) And it was not until Margo Posner was being led away that Tyler realized what it was about her that reminded him so much of Kendall.

(S. Sheldon, *Morning, Noon and Night*)

出水によれば、進行形では事態の進行過程における 1 時点が主節を境界化する基準として機能する。つまり、進行形は動画から取り出した 1 コマの静止画として主節事態を境界化する機能を果たしている (出水 2002: 69)。

以上が出水 (2002) による until 節における動詞句の分析であるが、達成動詞、到達動詞の内在的終結点の主節事態を境界化することは理解されるにせよ、進行形の場合、いかにして境界化がなされるのか説明が不十分である。上記のように説明するだけでは until 節における進行形の境界化のメカニズムを明らかにしたことはない。また、達成動詞、到達動詞の場合であっても、事態の内在的終結点という、アスペクトに関係する部分にだけとらわれていては境界化を適切に説明することにはならないと思われる。いかなる動詞句が until 節に生起可能であるか説明するためには、さらに踏み込んで動詞句の境界化に関係する意味論的要因を明らかにする必要がある。

さらに、出水の分析について 2 点ほど指摘しておきたい。まず、until 節の機能について (1b) に「until 節内の bounded な事象が持つ時間的境界を、主節の unbounded な事象へと写像する」と述べているが、この説明と矛盾する指摘が出水 (2002: 65-66) に見られる。

(6) a. John pushed the cart. (unbounded atelic)

b. John pushed the cart into the barn. (bounded telic)

c. John was pushing the cart into the barn. (unbounded telic) (Depraetere 1995: 11)

動詞句が [-bounded] [-telic] である (6a) は、場所の副詞によって (6b) のように [+bounded] [+telic] とな

る。しかし、(6c) のように進行形で表されると、完結性は保ちつつ時間的に境界に達していないと出水自身 Depraetere (1995) を引用して説明している<sup>1</sup>。出水は (1b) によって (5) の until 節が bounded であると主張していると考えられるが、(6c) を unbounded であるとするれば、両者のあいだに矛盾が生じる。until 節の進行形がどういった意味で bounded であるのか不明である。通常、進行形が有界の事態を表わしているとは考えられない。いかなる場合に進行形を bounded であるとするのか明確な規定が必要であろう。

さらに、出水は [±telic] の代案として [±bounded] を導入すると述べているが、むしろ until 節における動詞句の生起可能性について論じる場合、アスペクト制約の方が重要であると考えられる。[+telic] である (つまり動詞句の表す事態が内在的に終結点 (あるいは開始点) を有する) というアスペクト制約は、until 節での生起に関わる重要な要因の一つであり、決して無視することはできない。

3 節でこの点について考えてみたい。

## 2. Heinämäki (1974)

この節では、出水が until 節の分析の拠り所としていられると思われる Heinämäki (1974) の問題点を指摘したい。さらに、本稿では後の分析に基準時という概念を導入する必要があるため、基準時が Heinämäki の言うところの基準点とは基本的に異なるものであることも併せて示しておきたい。

### 2.1. when 節

Heinämäki (1974) は 4 タイプからなる Vendler (1967) の動詞句アスペクトの分類を修正し、動詞句はアスペクトの点から継続動詞 (durative)、非継続動詞 (non-durative)、達成動詞 (accomplishment) という 3 種類に分類され、それらすべての動詞句が主節と時を表す従属節の両方に生起可能であると述べている。when 節を伴う文については次のように説明される。

(7) a. It was raining in New Orleans when we were there.

b. Everybody was away when John destroyed the documents.

c. We were crossing the street when John noticed us.

d. The balloon broke when Lydia was playing with it.

e. They built the wall when bricks were still very cheap. (Heinämäki 1974: 24)

主節に関して言えば、(7a)-(7c) は継続動詞、(7d) は非継続動詞、(7e) は達成動詞である。従属節に関しては (7a)(7d)(7e) が継続動詞、(7b) が達成動詞、(7c) が非継続動詞である。そして、when 節を伴う文の場合、主節と従属節の表す期間 (あるいは瞬間) が重なっていれば、

これらは真である。(7a)のように when 節の継続状態が主節の継続状態と時間的に重なっている場合もあれば、(7c)のように when 節の非継続的事態が主節の継続の一点と重なる場合もある。また逆に、when 節に継続動詞が現れ、主節に非継続動詞が現れる (7d)(7e) のような場合もある<sup>2</sup>。

## 2.2. before 節事態と主節事態の時間的關係

Heinämäki は、when 節とその主節の動詞句に対して行ったのと同じ分析を、before 節、after 節、until 節とその主節の動詞句に対しても適用している。しかし、when 節に対する分析をその他の従属節に適用することは不適切であり、問題を生じさせる。ここでは紙面の関係上、before 節のみについて分析の不備を見ていくことにしたい。

Heinämäki によれば、before 節とその主節の動詞句が表す事態の時間的關係は次のように説明される。

- (8) a. John noticed us before we noticed him.  
 b. We left before it was dark.  
 c. Our dog was barking before the neighbor's dog was (barking).  
 d. Mark built a sailboat before he knew how to sail.  
 e. Agatha was in Egypt before she wrote the story.

(Heinämäki 1974: 47)

(8a) では主節、従属節ともに非継続動詞が現れ、主節事態の開始点が従属節事態の開始点より時間的に前であることが述べられている。(8b) では非継続の主節事態が従属節によって表される状態の開始点より時間的に前であることが示されている。従属節事態を状態の開始点とその継続とする分析は、出水が (4) に対して行っているものである。また、(8c) では主節が表す期間の開始点が従属節の表す期間の開始点に先行している。さらに、(8d) では主節の表す期間の終結点が従属節の表す期間の開始点より時間的に前であることが示されている。(8e) では主節の表す期間の開始点が従属節の表す期間の開始点より時間的に前である。

when 節事態と主節事態の關係は両者の重なりから説明されるが、before 節を含む文では、当然のことながら主節、従属節の前後關係が問題となってくる。この説明において Heinämäki は開始点、終結点という 2 点を基準点 (reference point = tr) と考え、before 節事態における基準点は事態の開始点 (I(B)) であり、主節事態における基準点は動詞句が達成動詞の場合、事態の終結点であり、それ以外の場合、開始点であると述べている。これに基づいて *A BEFORE B* が真である条件を以下のように提示している。

- (9) *A BEFORE B* is true at the present moment (tp) if and only if  
 (i) *A* is true at some interval,  
 (ii) *B* is true at some interval, and  
 (iii)  $tr(A) < I(B)$ . (Heinämäki 1974: 49)

この分析の問題点を明確にするため、ここでは以下の

点について考えてみたい。

- (10) a. (9iii) において示されているように  $tr(A)$  との前後關係の対象とされるのは常に  $I(B)$  か。  
 b. when 節において継続動詞とされるものを before 節でも継続動詞とみなしてよいか。  
 c. *A BEFORE B* において述べられているのは実際に基準点、つまり主節、従属節の開始点・終結点の前後關係か。  
 d. Heinämäki の言う基準点と時制に関する基準時は同一概念か。

まず (10a) であるが、これに関しては必ずしもそうでない例が見られる。(8e) の before 節は Heinämäki の説明にあるように開始点を基準点とする解釈も可能であるが、終結点を基準点とする解釈も可能である。つまり、主節の開始点との時間的前後關係を表しているのは before 節の終結点、すなわち本を書き終わった時点であるとする解釈である。この解釈が可能であれば、必ずしも before 節事態の開始点が基準点である必要はない。後に述べるが、until 節についても同様のことが言え、until 節事態も開始点・終結点の両方を表すことができる。

また、Heinämäki によれば、(8d) における before 節では事態の開始点が基準点である。これは、ボートの操縦法を習得した状態が、ボートの完成より時間的に後に発生していることを表していると解釈される。しかし、ある時点から突然ボートの操縦法に関する知識が備わり、その継続状態が主節事態に後続するという解釈より、「船を操縦するための勉強をボートが完成する前に始めたが、結果的に操縦法の習得が完成に間に合わなかった」という解釈の方が自然であるし、通常この内容を伝えるために (8d) が発話されるはずである。ここで、(10b) が問題となってくる。例えば、(8b) に関して実際、暗くなるという事態が始まる前に出発していれば (8b) は真であろう。しかし、「暗くなる」という事態はその事態が始まった瞬間に真っ暗になり、以後その状態が続くということの意味しているわけではなく、徐々に暗くなることを意味している。そのため、when 節において継続動詞とみなされたものであっても、before 節では到達動詞 (あるいは達成動詞) と解釈されるべきである<sup>3</sup>。つまり、(8b)(8d) の before 節事態で基準点となっているのは開始点ではなく終結点であると考えられる。 $tr(A)$  との時間的前後關係の対象とされるのは常に  $I(B)$  とは限らず、when 節において状態動詞とみなされるものであっても、before 節や until 節では到達動詞、あるいは達成動詞とみなされるべきである。

さらに、(10c) について考えてみたい。例えば、主節、従属節ともに非継続動詞をとる (8a) は Heinämäki が主張するように before 節の開始点が主節の開始点に先行している、つまり Heinämäki の言うところの基準点の前後關係が問題とされていると説明されるかもしれない。しかし、(8c) についてはこの説明は必ずしも当てはまらない。実際に (8c) の主節、従属節の進行形がそれぞれ事態全体を表しており、主節の表す期間の開始点が従属節

の表す期間に先行している場合もあろう。しかし、主節、従属節の開始点の時間的關係が Heinämäki の主張のままでありながら、それぞれの事態の一部についてしか述べられていないという解釈も可能である。この場合、主節の表す一定の継続的事態が before 節の表す一定の継続的事態に先行するか、あるいは主節事態の一時点が before 節事態の表す一時点に先行していれば、(8c) は真であると解釈される。ここでは、主節事態と従属節事態の前後関係が問題とされているが、そこに開始点、終結点といった Heinämäki の言う基準点は関与していないのである。tr (A) < I (B) が成立していれば、(8c) は真であるが、それがすべての可能性ではない。そのため、A BEFORE B において述べられているのは必ずしも Heinämäki の言う基準点の前後関係ではないと結論される。

結果的に (10d) に対する答えも明らかとなる。Heinämäki の言う基準点は Reichenbach (1947) によって提唱された基準時 (point of reference) とは別の概念である。Heinämäki 自身 Reichenbach の言う基準時を念頭に置いて開始点、終結点を基準点と呼んだのかもしれないが、必ずしも基準点が基準時であるとは限らない。基準点が基準時でないことは when 節について考えれば明らかである。Heinämäki 自身は when 節を説明する際に基準点という概念を用いていないが、基準点が基準時であるとすれば、(7d) では when 節の動詞が継続動詞であるため開始点が基準点となり、遊び始めた瞬間に風船が破裂すると解釈され、(7e) ではレンガが安いという状態が始まった瞬間に塀を作り終わることになる。しかし、実際にはこれらの when 節が表す状態の途中の一時点が主節事態と同時であると解釈される。このように、時制に関する基準時という概念は、Heinämäki の言う基準点と同一のものではない。

以上の議論から言えるのは、主節との時間的前後関係を計算する場合、常に before 節事態の開始点が基準点となるとは限らないこと、when 節において継続動詞とみなされる動詞を before 節 (あるいは until 節) において継続動詞とみなすべきではないということである。この場合、到達動詞 (あるいは達成動詞) とみなされるべきであり、出水が主張するように until 節事態の開始点が境界として機能するわけではなく、終結点が境界として機能すると考えられる。さらに、(7d)(7e)(8c) から明らかのように Heinämäki の言う基準点とは、時制概念において仮定される基準時とは別のものである。

### 3. until 節における時間的境界

ここで、until 節に生起する動詞句に課される意味論的制約を探るため、until 節に問題なく生起可能な到達動詞、達成動詞について考えてみたい。

Kittredge (1969) では、until 節の動詞句は完結的 (perfective) でなければならないとされている。これに基づいて出水 (2001: 143-144) では、[+telic] [-durative] な到達動詞と [+telic] [+durative] な達成動詞が、それぞ

れ (11)(12) のように until 節に現れると述べられている。

(11) Ellery watched his drooping shoulders until they vanished.

(E. Queen, *The Chinese Orange Mystery*)

(12) “Who gossiped such tripe? You’d better tell me. I’m not going to let you sleep until you tell me.”

(I. Wallace, *The Guest of Honor*)

出水 (2002) は、最終的に until 節に生起可能な動詞句が [+bounded] という特徴を有していなければならないと説明するが、1 節でも指摘したように、どういった意味でそれが [+bounded] であるか不明である。むしろ、これらの例に見られるように until 節に生起可能な動詞句は [+telic] というアスペクト制約に従っていると考える方が妥当である。

但し、動詞句のアスペクトのみにとらわれていては until 節における境界化を明確にすることはできない。アスペクトとは、事態内部の時間的構成に関する概念である。従って、到達動詞や達成動詞のアスペクト制約を [+telic] と規定するだけでは、それらの表す事態が終結点を内在していることを示したに過ぎず、実際に境界化がどのようになされるかを説明したことにはならない。

それではいかにして (11)(12) において境界化がなされるのであろうか。Reichenbach (1947) 以来、時制は出来事時 (E)、基準時 (R)、発話時 (S) という 3 点からなる体系として説明されてきた。この中で until 節における動詞句の境界化に重要な役割を果たしているのは基準時である。(11) の到達動詞の場合、アスペクトによってもたらされる内在的終結点が基準時によって時間軸上に投錨され、この時点が主節事態を境界化する時点として実現されるのである。もちろん、到達動詞の基準時は、期間ではなく一時点である。

(13) a. At what time did you reach the top?-At noon sharp.

b. At what time did you spot the plane?-At 10:53 a.m.

基準時 R は時の副詞によって表されるとされるが、これらの動詞句の基準時は瞬時的なものでなければならない。この瞬時的基準時が終結点を時間軸上に投錨し、until 節の境界化が実現されることになる。

また、達成動詞の場合も終結点として機能しているのはプロセスの終了時点であると考えられる。

(14) John built a cabin last summer. (Smith 1997: 29)

(14) の場合、基準時 R は last summer によって表されているが、last summer 全体が基準時として機能しているわけではなく、家を建てること完了した時点が last summer における一時点であると解釈される。つまり、達成動詞においても終結点を時間軸上に投錨する基準時は瞬時的でなければならない。

さらに、基準時 R は必ずしも終結点のみを指しているわけではない。

(15) a. They will go to the station at seven o'clock.

(Declerck 1991: 272)

b. They walked to school at noon.

(Smith 1997: 29)

Smith (1997: 29) によれば, (15) のような例は過程段階に入ることを示す起動文 (incentive sentence), 例えば They began to walk to school. によって間接的に表される. 到達動詞や達成動詞の場合, その事態が表す終結点が基準時によって時間軸上に投錨され, 時間的境界として実現される. しかし, begin を含む起動文や暗示的に起動文の解釈を持つ (15) においては事態の開始点が時間的境界として基準時によって時間軸上に投錨されている.

以上の観察から結論されるのは, これらの動詞句が until 節において主節事態の境界として機能する場合, 動詞句のアスペクトによってもたらされる事態の開始点・終結点が基準時 R によって時間軸上に投錨されているということである. これは, 事態の開始点・終結点と基準時 R が時間軸上で重なっていることであると言い換えることもできる. これらの2点が時間軸上で重なっている到達動詞, 達成動詞などが until 節に生起する無標の動詞句である.

ここから until 節に生起する動詞句は次の意味論的制約に従わなければならないことが分かる.

(16) until 節に生起する動詞句の意味論的制約

until 節内に生起する動詞句は, 動詞句アスペクトによってもたらされる事態の開始点・終結点が瞬時的基準時 R によって時間軸上に投錨されなければならない.

until 節に現れる動詞句は, 動詞句のアスペクト制約から動詞句が表す事態に開始点・終結点を持たなければならない. これが存在しなければ, 時間的境界として機能する要因を欠くことになる. また, それを時間軸上に投錨する基準時 R は瞬時的でなければならない. このような2点を有する動詞句のみが until 節に生起可能となる.

#### 4. until 節における進行形の時間的構造

本稿では, until 節に生起する動詞句の意味論的制約を以上のように規定したが, ここではその規定に従う進行形の特徴について観察する.

##### 4.1. 進行形における基準時

3 節において述べたように, 到達動詞や達成動詞は動詞句のアスペクトによって内在的開始点・終結点 (以後, 潜在的基準点という意味で  $R_0$  と表記する) を備えており, これが基準時 R (以後,  $R_1$  と表記する) によって特定の時として指定される. 結果的に, これらの動詞句は until 節に問題なく生起可能となる. 多くの例において until 節の動詞句アスペクトが [+telic] であるという事実は, これが生起可能性に関する条件の1つであることを示しており, 出水 (2001) によって指摘された until 節内の動詞句のアスペクト制約はやはり無視することができない. それでは以上の観察は until 節における進行形

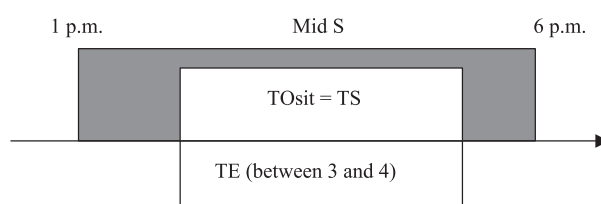
にいかん適用できるであろうか.

これまで until 節における進行形に関しては, その生起可能性のみが議論されてきた感がある. 結果的に進行形は until 節に生起可能であることが示されているが, 問題はこの段階にとどまらない. 進行形には until 節に生起可能なものと生起できないものがあると考えられる. それぞれの時間的構造について以下で考えてみたい.

到達動詞, 達成動詞が  $R_0$  と  $R_1$  を有していたように, 進行形においても  $R_0$  と  $R_1$  が必要である. ここではまず, 進行形の until 節への生起可否に直接関わる  $R_1$  について考えてみたい.

Declerck (1991) は進行形によって表される事態全体を Mid S (middle of the situation) と呼んでいる.

(17) Between three o'clock and four Bill was reading a book. (Declerck 1991: 274)



ここでは Mid S は1時から6時の間に成立している全体としての事態である. しかし, 文としての (17) は事態全体の長さを問題としているわけではなく, was reading によって表される事態が3時から4時の間に成立していたという情報のみを伝えている. Declerck は, 基準時 R とみなされてきた概念を TE (time established (by a time adverbial or by the context)) と TOsit に分けている. 副詞句あるいは副詞節が実際に表している時を TE とし, それと実質的に同じ長さの TS (time of situation) を TOsit とする. つまり, (17) では was reading によって表されている事態が3時から4時の間に成立しているという関係 TE=TOsit が述べられているのである<sup>4</sup>. この場合, TE すなわち R は時間的に幅を持っており, 瞬時的なものではない.

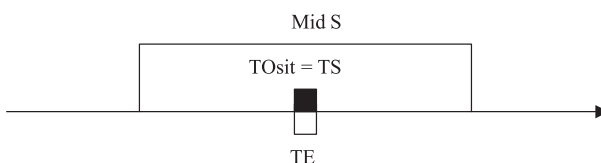
(18) \*Mary waited until Bill was reading a book between three o'clock and four.

結果的に, このような進行形は until 節に生起することができない.

一方, 同じ進行形であっても until 節に生起可能なものは時間的構造が異なっている. 到達動詞, 達成動詞における観察から判断して, until 節に生起する場合, 進行形であっても  $R_1$  は瞬時的であると予測される.

(19) John was sleeping when I arrived.

(Declerck 1991: 273)



(19) において主節によって表される事態 (Mid S) には通常時間的に幅があると考えられるが, when 節によ

て表される TE は瞬時的であるため、結果的に TE によって切り取られる TOsit も瞬時的とならざるを得ない。つまり、進行相というアスペクトによって継続的な事態について言及しているはずの進行形ではあるが、(19) は Declerck の言うところの TE (あるいは基準時 R) によって実際には進行中の事態の 1 時点についてしか言及していないのである。(5) のように until 節に進行形が可能な場合、その TE (すなわち R) は瞬時的であり、このことは「動画から取り出した 1 コマの静止画」という出水の指摘とも符合すると考えられる。

このように瞬時的 R を有する進行形のみが until 節に生起可能な特徴を備えることになる。さらに、結論を先取りして言えば、until 節の進行形に関して厳密な意味で主節事態を境界化するのには、開始点・終結点といった潜在的基準点  $R_0$  というより、それらを伴う瞬時的基準時  $R_1$  である。

#### 4.2. until 節における開始点・終結点

さらに、until 節に生起する進行形が  $R_1$  とともに事態の開始点・終結点という潜在的基準点  $R_0$  を備えていることについて考えてみたい。

内木場 (2004) は until 節の進行形を 3 タイプに分類している。まず、until 節に生起可能な進行形として内木場があげるものに到達動詞がある。

(20) We saw each other a lot, and we were very close,  
but we didn't live together actually until he was  
dying. I took three months off work and took  
care of him. (D. Steel, *The Ranch*)

到達動詞の場合、動詞句のアスペクトによって必ず終結点を内在している。但し、この動詞の進行形が単純形と異なる点は  $R_0$  が  $R_1$  と時間軸上で重なっていないことである。到達動詞の単純形では  $R_0$  と  $R_1$  が時間軸上で重なっており、until 節の境界化という機能を問題なく果たしている。しかし、到達動詞の進行形では  $R_1$  が  $R_0$  に時間的に先行し、 $R_1$  が時間的境界として機能するという有標のケースをなしていると考えられる。有標のケースでありながら、until 節から排除されない理由は、到達動詞の進行形が (16) の制約に完全には従っていないものの、潜在的基準点  $R_0$  と瞬時的基準時  $R_1$  を両方備えているからである。

但し、until 節に生起する進行形において実際に時間的境界となっているのが  $R_1$  であるとすれば、 $R_0$  は現実的に必要なかという疑問が生じるかもしれない。ところが、 $R_0$  は重要な認知的役割を担っており、until 節の境界化の機能を説明するには不可欠な要素となっている。それは、 $R_0$  が Langacker (1993) によって提唱された参照点 (reference point) として機能しているということである。人間には、特定の概念構造を構築する際に、まず際立ちの大きい部分、すなわち参照点にアクセスし、そこからそれに関係する際立ちの小さい部分に接触して概念化するという基本的な認知能力が備わっている。この能力は言語活動においても当てはまり、参照点を利用

した参照点構文にはメタファー、所有構文、繰り上げ構文 (河上 1996) や日本語のトピック構文などがあるが、到達動詞、達成動詞の進行形も参照点構文に属すると考えられる。つまり、 $R_1$  は際立ちが小さく、概念主体 (conceptualizer) にとってアクセスしにくいいため、まずこれらの動詞句が表す事態の潜在的基準点  $R_0$  にアクセスし、そこから  $R_1$  に接触することになる。そのため、到達動詞、達成動詞の進行形では、until 節において時間的境界として機能する  $R_1$  とともに必ず  $R_0$  が必要であると考えられる。

さらに、潜在的基準点  $R_0$  が概念構築に必要な参照点として機能していることは、 $R_1$  と  $R_0$  が時間軸上で離れていないという我々の認識からも支持されるかもしれない。もちろん、両者の距離が時間的に離れていないという判断は客観的なものではなく心理的なものであるが、もし話者が  $R_1$  と  $R_0$  を離れていると認識すれば、時間的に離れた  $R_0$  を備えた動詞句の進行形を用いるのではなく、 $R_1$  と時間軸上で重なっている別の事態を until 節に選択するはずである。ターゲットとなる  $R_1$  から  $R_0$  が離れ過ぎている場合、 $R_0$  は参照点としての役目を果たしにくく考えられるからである。

また、基準点  $R_0$  が  $R_1$  と時間軸上で離れていないという認識は、進行形によって表される事態が一時的な継続を意味しているという事実とも符合するかもしれない。

さらに、内木場は第 2 のタイプの動詞として位置変化後の結果状態を表す動詞の進行形をあげているが、これについても到達動詞と同様に考えることができる。lie, rest, sit, stand, face, cover などによって表される事態は発生に関して瞬時的である<sup>5</sup>。

(21) a. He leaned forward until his head was lying  
against her shoulder. (BNC)

b. He rolled them slowly sideways until his body  
was covering hers. (BNC)

但し、この場合には到達動詞と異なり、その進行形が表す事態は開始点以降のものである。つまり、到達動詞、達成動詞の場合と異なり、 $R_1$  は  $R_0$  に時間的に後続することになる。ここでも厳密には基準時  $R_1$  が主節事態を境界化する機能を果たすが、 $R_1$  にアクセスするためには参照点としての潜在的基準点  $R_0$  が必要となる。

最後に、内木場は行為動詞の進行形をあげ、行為が開始された後の継続状態全体が 1 つの局面としてとらえられていると述べている<sup>6</sup>。

(22) a. She cooked dinner for Ken. He waited until  
they were having dessert before he brought up  
the subject. "I don't want to pry," he said, "but  
shouldn't whoever the proud papa is be doing  
something—?" (S. Sheldon, *Rage of Angels*)

b. Then I went to work in a five and ten, and  
gradually worked my way up until I was  
managing a general store. (BNC)

これらの例でも開始点が時間軸上で  $R_1$  に先行し、参照点としての  $R_0$  から  $R_1$  へアクセスされていると考えられ

る。但し、(22) の動詞句は到達動詞などと異なり、通常動詞句そのものに  $R_0$  を内在しない。しかし、例えば (22a) では食事の開始点が「料理をつくってくれた」という文脈情報から理解され、それによって間接的にデザートを食べはじめる開始点も与えられると考えられる。また、(22b) でも「朝5時から夜10時までの仕事につき、こつこつ働いた」という文脈から当然の結果として店長を任せられるであろうという、店長として働くという事態の開始点が推測される。つまり、行為動詞の進行形であっても  $R_1$  にアクセスするための  $R_0$  が文脈情報などによって与えられることによって until 節に生起可能となると考えられる。もちろん、推論のみによって  $R_0$  を仮定しなければならない例もあると考えられるが、いずれにせよ  $R_1$  にアクセスするための  $R_0$  が想定される場合に、これらの動詞句の進行形が until 節に生起可能になると考えられる。行為動詞の進行形が until 節に不可能であると判断されるのは、 $R_1$  にアクセスするための  $R_0$  が与えられていないと解釈されるからである。

このように進行形が until 節に生起可能な場合、到達動詞や達成動詞の単純形と同様に  $R_1$  とともに  $R_0$  を備えていることが窺える。結果的に until 節に生起可能な動詞句の意味論的制約は潜在的基準点  $R_0$  と瞬時的基準時  $R_1$  を両方備えていることであると結論される。単純形の場合のように、これら2点が時間軸上で重なるのが無標のケースであるが、進行形の場合には2点が時間軸上で重ならない有標のケースをなしている。

## 5. 関連諸問題

本節では、これまでの考察を踏まえ、動詞句の until 節への生起可否に関連する諸問題について考えてみたい。

### 5.1. 起動相的解釈

出水は until 節における状態動詞を説明するため、Smith (1997), Rappaport Hovav and Levin (1998) に従って起動相的解釈を採用している。この主張は、be 動詞の意味を状態に限定し、そこから到達動詞の解釈がアスペクト再解釈によって派生されるというものである。Smith (1997: 182) 自身 Shifted Achievements という術語を用いており、いかにも状態動詞であったものが、到達動詞へと変化したかのような印象を与える。

しかし、1つの動詞が複数のクラスに属している、つまり2つの意味を有していると考えることで起動相的解釈を採用する必要はない。Smith (1997: 85) は (23) における主節の be 動詞が起動相的解釈と状態を表す解釈のあいだで両義的であると述べている。

(23) Mary was angry when John broke the glass.  
(23) が両義的であるということは be 動詞に複数の意味があるということに他ならず、be 動詞の意味を状態に限定し、until 節に現れる際にアスペクト解釈し直す必要性は全く見あたらない。

また、出水 (2001: 147) は、until 節の動詞句が状態動詞である場合、主節事態の終了時点とみなされるのは be 動詞の表す状態の開始点であると述べている。2.2. 節でふれたように、この判断は Heinämäki の分析に従った結果である。しかし、(24) において「機嫌が良い」という状態の開始点に焦点を当てておきながら、状態動詞を起動相的解釈によって到達動詞と解釈することは矛盾している。

(24) Claire kept telling funny stories until Paul was in a good mood. (Heinämäki 1978: 81)

状態動詞が起動相的解釈によって到達動詞として解釈されるのであれば、やはり until 節事態の終結点が主節事態を境界化するはずである。この場合、先にも述べたように be 動詞に対して複数の意味を仮定すれば、到達動詞と同様に until 節事態の終了時点が主節事態の終了時点となる。状態動詞に対する出水の主張を好意的に解釈すれば、until 節の状態動詞が起動相的解釈によって到達動詞と理解される場合でも、通常その結果状態は少なくともしばらくのあいだ継続するはずであるから、結果状態の開始点に焦点が当てられている、つまり結果状態の開始点が主節事態の終結点であるということになるのかもしれない。しかし、この説明はもちろん不適切である。到達動詞はある事態に到達することを述べているのであって、到達後の事態を述べているわけではないからである。

このように be 動詞の意味を状態のみに限定し、起動相的解釈を用いて until 節に生起する be 動詞を説明しようとするれば、論理的矛盾に陥りかねない。やはり、be 動詞は複数の意味を有しており、until 節に現れる be 動詞は到達動詞と同じ [+telic] というアスペクトを持つと仮定するのが妥当であると考えられる。

### 5.2. 行為動詞

行為動詞が until 節に生起不可能であると判断される理由については、通常の場合、1節で示した出水の説明で十分であると考えられる。論理的には、行為動詞によって記述される事態についても開始点・終結点は存在し、それらが境界として機能することが仮定される。しかし、基準時  $R$  の点から言えば、行為動詞において  $R$  によってマークされるのは行為が成立している幅のある期間であって、これまで説明してきたような瞬時的なものではない。その結果、たいていの場合、行為動詞は until 節に生起不可能となる<sup>7</sup>。

さらに、 $R$  が瞬時的であるということと  $R$  が瞬時的に捉えられるということは基本的に異なっている点についてもふれておきたい。次の例は過去進行形ではなく単純過去で述べられているため、Declerck は事態が bounded に捉えられていると述べている。

(25) Between three o'clock and four Bill read a book. (Declerck 1991: 274)

出水 (2002) は until 節に生起可能な動詞句の特徴として [+bounded] をあげているが、この点からのみ until 節

の動詞句を規定するのであれば、(25) は until 節に生起可能なはずである。

しかし、(25) は行為動詞であり、until 節には生起できない。(25) は事態が単純過去で表されており、あたかも過去における 1 時点で成立しているかのような印象を与える。しかし、この場合でも R は副詞句によって示されているように瞬時的ではない。発話時と事態との時間的關係から (25) のように単純過去によって表されることは可能であるが、実際の TS に相当する T<sub>osit</sub> (= T<sub>E</sub>) には時間的幅がある。結果的に、このような動詞句は瞬時的 R を持たないため、until 節に生起することができない。

通常、行為動詞が瞬時的 R を持たないという事実は次の例からも明らかである。

(26) \*Bill read a book when I arrived.

(27) \*Mary walked along the street when Bill arrived.

いずれの例における行為動詞も瞬時的 R を表す when 節と共に起ることができない。

さらに、行為動詞の進行形について見ておきたい。行為動詞が進行形で用いられる場合、瞬時的 R を有している例がある。

(28) \*Mike waited until Mary was standing there at that time.

この例において進行形の R<sub>1</sub> は at that time によって明示され、瞬時的である。しかし、通常の解釈では (28) は容認されないはずである。その理由は、この文に参照点となる潜在的基準点 R<sub>0</sub> が含まれていないからである。until 節に進行形が可能な場合、R<sub>1</sub> とともに R<sub>0</sub> が必要であるが、(28) では R<sub>0</sub> の存在を窺わせる情報が確認できない。その結果、瞬時的 R<sub>1</sub> を有する進行形であっても、R<sub>0</sub> を備えていなければ、until 節に生起することができないと判断される。

### 5.3. until 節における進行形

進行形が until 節に生起する場合も①瞬時的 R<sub>1</sub> を有しており、②動詞句に潜在的基準点 R<sub>0</sub> が与えられていなければならない。但し、until 節に進行形が現れる場合、先にも述べたように潜在的基準点 R<sub>0</sub> と瞬時的基準時 R<sub>1</sub> とが時間的にずれていると考えられる。この時間的ずれが大きい場合、進行形を用いることは情報的価値を失うはずであり、until 節には別の事態が選択されることになる。

さらに、動詞句によっては進行形に R<sub>0</sub> が情報として与えられていない場合がある。しかし、4.2 節で見た行為動詞の進行形のように、開始点・終結点が文情報、文脈情報などによって近接可能なものであれば、until 節において進行形が用いられてよい。

衣笠 (2005) は進行形を含む until 節を「場面設定を示す用法」と「行為の進行具合を示す用法」に二分している。そして、後者では主節事態の最終局面が until 節において表されていると述べている。衣笠 (2005: 105-106) によれば、次の例が容認されない理由は、ダン

スを踊り続けた最終局面を音楽が終わりかけている時点であるとする解釈が受け入れられないからである。

(29) ?\*Alex danced until the music was stopping.

しかし、(29) が容認できないとされるのは、主節事態と従属節事態の意味的結びつきが自然でないことに原因があると考えられ、was stopping 自体に原因が求められるべきではない。ダンスは音楽に合わせて行うため、音楽が終わるまでダンスをするという解釈は自然であるが、音楽が終わりかけている時点まで踊るという解釈は通常理解できない。但し、内木場 (2004: 106-107) も指摘しているように「音楽が終わりかけている時点までアレックスは踊り続けた」という解釈が可能となる文脈では、(29) は until 節に進行形を含む他の例と同様に容認可能なはずであり、潜在的基準点 R<sub>0</sub> と瞬時的基準時 R<sub>1</sub> を備えた was stopping そのものに (29) を不適格とする原因があるとは考えられない。

これに対し、ダンスを踊るという行為は常識的に汗をかき始めるための開始点を含意しているはずであり、②において要求されている R<sub>0</sub> を補いつつ①の条件を満たすことになる。

(30) a. We danced until the sweat was dripping.

b. We danced until the sweat was pouring down our faces and bodies. (衣笠 2005: 106)

(30a)(30b) では、ダンスをするという行為によって汗をかき始めるための開始点が与えられており、この開始点を参照点として瞬時的基準時 R<sub>1</sub> がアクセスされ、これが主節事態を境界化する機能を果たしている。

## 6. おわりに

until 節に生起可能な到達動詞、達成動詞が単純形で現れる場合、さらに起動文では、これらによって表される事態に潜在的基準点 R<sub>0</sub> が内在されており、それが瞬時的基準時 R<sub>1</sub> によって時間軸上に投錨される。つまり、R<sub>0</sub> と R<sub>1</sub> が時間軸上で重なっており、これが until 節において境界として機能することになる。このように R<sub>0</sub> と R<sub>1</sub> の重なる動詞句が until 節に生起する無標のケースである。

一方、進行形が until 節に生起する場合、潜在的基準点 R<sub>0</sub> と瞬時的基準時 R<sub>1</sub> は時間軸上でずれており、有標のケースをなしている。この場合、R<sub>1</sub> が主に境界化に関わることになるが、それは必ずしも R<sub>0</sub> の存在を否定しない。until 節における進行形では、R<sub>0</sub> は R<sub>1</sub> にアクセスするための際立ちの大きい参照点として機能しているからである。従って、進行形においても until 節に生起可能であるためには潜在的基準点 R<sub>0</sub> と瞬時的基準時 R<sub>1</sub> を両方備える必要がある。

さらに本稿では、起動相的解釈の矛盾点について指摘し、行為動詞やその進行形が通常 until 節に生起不可能であると解釈される理由として、それらの事態における R<sub>1</sub> が瞬時的でないこと、あるいはそれらの表す事態に R<sub>0</sub> が与えられていないことを述べた。しかし、行為動詞



の進行形であっても瞬時的基準時  $R_1$  を有し、潜在的基準点  $R_0$  が文脈などによって与えられていると解釈される場合には until 節に生起することが可能である。

## 注

<sup>1</sup> 出水は、until 節の時間的機能を説明するには境界性 (boundedness) という概念が必要であるという Depraetere (1995) の主張を採用している。

i) (A)telicity has to do with whether or not a situation is described as having an inherent or intended endpoint; (un)boundedness relates to whether or not a situation is described as having reached a temporal boundary. (Depraetere 1995: 2-3)

完結性が語彙アスペクトにおける内在的な終結点の有無に関係しているのに対し、境界性は時間的境界に達しているか否かに関係する。しかし、ここで述べられている時間的境界とは (6b) のように事態が終了することについて述べたものであると考えられ、進行形の場合には当てはまらない。

<sup>2</sup> 但し、主節事態と when 節事態が時間的に重なるといふ説明だけでは文全体が表す事態を捉えているとはいえない。時を表す従属節が基準時であるとする Reichenbach (1947) の主張からすれば、when 節事態が継続的である場合もそうでない場合も、主節事態と時間的に同じ長さの事態を表しているはずである。(7d)(7e) では when 節に継続動詞が現れ、主節事態より長い事態を表しているかに考えられるが、実際には when 節事態の一部と主節事態が同時であることが述べられている。これについては 4.1 節で詳しく述べたい。

<sup>3</sup> 1 節で見たように、この現象について Smith (1997) は起動相的解釈によってアスペクト再解釈が引き起こされていると述べ、出水 (2003) もこの解釈を採用しているが、これについては 5.1 節で議論したい。

<sup>4</sup> (17) では TE を Mid S の一部としたが、TE は Mid S と同じ長さであってもよい (Declerck 1991: 274-275)。

<sup>5</sup> 内木場は until 節に現れる動詞句の進行形を 3 タイプに分類しているが、 $R_1$  が時間軸上で  $R_0$  と重なっていないという本稿の主張からすれば、 $R_1$  が  $R_0$  より時間的に前にある場合と後にある場合の 2 タイプに分類されるべきである。

<sup>6</sup> 出水 (2002) では、行為動詞は until 節に生起しないと主張されたが、実際行為動詞は until 節に生起可能である。

i) Matt passed himself through the window, one limb at a time. Moving slowly, he inched his entire frame through the opening until he was standing in the room. (D. Gram, *The Trigger Effect*)

ii) Matt passed himself through the window, one limb at a time. Moving slowly, he inched his entire frame through the opening until he stood in the room. (出水 2003: 92)

i) ii) では特定の位置や姿勢が始まったと解釈されるが、そのような意味を表すとすれば自らの主張と矛盾を生じることになると出水 (2003: 92-93) は述べている。i) では進行形に対して起動相的解釈をすることになるし、ii) では行為動詞であるはずの stand が until 節に生起するからである。

これを解決するため、stand は主語の意思によるコントロールの点から行為動詞とみなされるということは認めつつ、時間的性質に関しては状態動詞と同じであると考へ、i) に対しては until 節に現れる進行形と同様の機能を果たすとみなし、ii) に対しては起動相的解釈がなされると結論している。

しかし、これらに対しても  $R_0$  と  $R_1$  を用いる方が、より自然で一貫性のある説明を与えることができる。

<sup>7</sup> もちろん、4.2 節で見たように行為動詞においても  $R_1$  が瞬時的であり、文脈情報などによって潜在的基準点  $R_0$  が与えられていれば、until 節に生起可能である。これらの場合には、ある意味、行為動詞とは呼べないかもしれない。

## 参考文献

- Declerck, Renaat (1991) *Tense in English*. London and New York: Routledge.
- Depraetere, Ilse (1995) "On the Necessity of Distinguishing between (Un)boundedness and (A)telicity." *Linguistics and Philosophy* 18, 1-19.
- Geis, Michael (1970) "Time Prepositions as Underlying Verbs" *CLS* 6, 235-249.
- Heinämäki, Orvokii (1978) *Semantics of English Temporal Connectives*. Indiana University Linguistics Club.
- 出水孝典 (2001) 「until 節内の動詞句のアスペクトと解釈」『英語語法文法研究』8: 141-155.
- 出水孝典 (2002) 「until 節内の動詞句の進行形と状態性」『六甲英語学研究』5: 53-71.
- 出水孝典 (2003) 「until 節内の位置・姿勢を表わす動詞句」『六甲英語学研究』6: 83-98.
- 河上誓作 (編) (1996) 『認知言語学の基礎』東京: 研究社.
- 今井邦彦・中島平三 (1978) 『文 (II)』(現代の英文法第5巻) 東京: 研究社.
- 衣笠忠司 (2005) 「until 節における進行形について」『英語語法文法研究』12: 95-109.
- Kittredge, Richard Irwin (1969) "Tense, Aspect, and Conjunction: Some Inter-Relations for English." Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania. University Microfilms, Inc.
- Langacker, Ronald W (1993) "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.
- Rappaport Hovav, Malka and Levin, Beth (1998) "Building Verb Meanings" In M. Butt and W. Geuder (eds.), *The Projection of Arguments:*

- Lexical and Compositional Factors*. 97-134. CSLI Publications.
- Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*. New York: Free Press.
- Smith, Carlota S. (1997) *The Parameter of Aspect* (Second Edition). Kluwer Academic Publishers.
- 内木場努 (2004) 『「こだわり」の英語語法研究』東京：開拓社.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.